

謝罪会見

○午後10時45分

「やっぱり、ダメだったよ」

「ダメでしたか」

「こっちから電話してみたけど、誰も出ないんだ」

「弱ったなあ」

「弱ったねえ」

「住所は確かに、ここなんですか？」

「間違いない。そのへんで末広ビルっていったら、そこしかないもん」

「裏に回ってみたんですが、三階の窓、ぜんぶ真っ暗なんですよ」

「待ちくたびれて、寝ちゃったのかねえ。まだ注文から30分もたってないけど」

「何度もチャイムを鳴らしたんですけど、誰も出てこないです」

「やっぱりイタズラだったかな。まあ、そんな気もしていたんだよ。電話してきた女、すこし様子がおかしかったもん」

「おかしいつて？」

「言ってることがチンプンカンプンで、突然、怒り出すやら、笑い出すやら、泣き出すやら。ピザ一枚注文するのに、一〇分かかってたからね。あれはきっと、変な薬でもやってたんじゃないかな」

「ヤバイなあ、もう」

「しょうがないよ。もういいから、帰っておいで」

「わかりました。もう一回だけ窓を確認して、それで明かりがついていなかったら、帰ります」

○午後11時50分

「火事ですか、救急ですか」

「……」

「もしもし、聞こえていますか？」

「ああ、はい……」

「火事ですか、それとも救急車の要請ですか」

「救急です」

「住所とお名前を教えてください」

「息をしないでいいんです」

「どなたがどうされましたか」

「女が息をしていない」

「年齢、性別、あなたとのご関係は」

「……」

「住所とお名前を教えてください」

「末広ビルです。高洲西、一丁目三の……」

「続けてください」

「……」

「もしもし、聞こえていますか？」

「あ、もしもし、すみません、間違いでした」

「間違い？」

「間違いです。救急車は要りません。来なくていいです」

「本当に、大丈夫ですか？」

「大丈夫です。どうもお騒がせしました」

○午前3時

（まったく、冗談じゃねーぞ。ふざけてんじゃねーぞ。仕事っていえば、電話一本でどこへでもホイホイ飛んでいくと思いやがって。しかも、わざわざこんな時間を指定して、嫌がらせかよ。）

金を入れた封筒はりつけて、ガキのお駄賃じゃねーんだぞ。人にものを頼むんなら、きちんと顔見せて、ご苦労様の一言もいいやがれ。運送屋なめやがって。

それにしても、エレベーターは狭いわ、廊下は狭いわ、本場にクソ忌まましいビルだな。末広ビルが聞いて呆れるってんだ。それに、いったい何を詰め込んだらこんなにクソ重くなるんだよ、このでっかいスーツケースはよ！）

○三日後 午後1時 最初の記者

「……ですから、今回の件につきましては、本人も大変反省しております。ボンネット大破という激しい事故でありながら、幸いにして怪我人も出ず、また、重大な法律違反もなかったわけでございますが、しかし、そのことをもって皆様からの非難を免れ得るとは、毛頭考えておりません。壊してしまった門柱につきましては、工場跡地の所有者、管理者の方が、現在特定できていない状態でございますが、判明し次第、すみやかに修復の費用をお支払いする所存でございます。本人は、今後は車の運転は控えると申しております。また、これまでの生活態度を猛省し、自らの行動を厳しく律してまいることを、誓っております。あらためまして、市民の皆様、県民の皆様、ご心配とご迷惑をおかけいたしましたことを、深くお詫び申し上げる次第でございます。まことに申し訳ございませんでした」

「本当に反省しているの？」

「もちろんです」

「それにしちゃ、さつきから南さんばかり謝っているよね」

「そのようなことはないと思いますが……」
「でっかい図体のあなたが、こんなに縮こまって頭を下げているのに、隣の靖史君はまるで他人事のような顔をしているよ。だいたい彼の格好からして、謝罪会見に臨む姿じゃないでしょう。シャツの襟をあけて、アクセサリーをじゃらじゃら付けて」

「着替える暇がなかっただけです。記者会見を聞くことを、靖史君には伝えていなかったものですから」

「靖史君、問題を起こしたのは君なんだよ。君の口から謝罪の言葉が出てこないことには、会見にならないよ」

「……靖史君、君からも何かひとこと言いなさい」

「……えー、今回、このような事故を起こし、まことに申し訳ございませんでした。今後はいっそう、安全運転を心がけます」

「するとこれからも運転を続けるつもり？ 南さんの話と違うけど」

「ああ、いや、車の運転をいっさいやめるというのは、私の言い過ぎだったかもしれませんが。ご存じの方もおられると思いますが、彼は左足の指が変形しておりますので、移動にはどうしても車が必要になる、という事情もございます」

「そのわりには、夜の街をふらふら徘徊しているのを、よく見かけるけどね」

「食事をしているだけだよ。カミさんに逃げられてから、もっぱら外食でね」

「パブやナイトクラブでかい」

「関係ない話はやめましょう。これは三日前の事故の会見でしょ。まあ、事故といっても、実質的には自損事故ですよ。それでも、これだけおおげさな会見をして謝っているわけだから、それでお許しいただきたくいですね」

「そんな言いぐさがあるかね。呆れたもんだ」

「申し訳ございません。本人は今朝、体調不良から回復したばかりでございます。また、事故を起こして大きなショックを受けているということも、お察しいただきたいと思います」

「だめだめ。そこで南さんが助け舟を出すから、本人はちっともこたえないんですよ。それでは靖史君のためにならない」

「あんたねえ、さっきから、僕の親父にでもなったつもり？」

「その親父さんに、君はどれだけ迷惑をかけてきたと思う？ 事務所をクビになるのも当たり前だよ」

「クビになったんじゃない。自分から辞めたんですよ。政治的な意見の対立でね。親父のやり方は古くていけない」

「南さん。今回の件を石橋先生はどう受け止めているんですか。いまだに正式なコメントが出てないが」

「もちろん、心を痛めております。ただ、石橋と靖史君は現在、いわば絶縁状態にあります。事実上、親子関係にはないといわざるをえない状況にありますので、今は遠くから心配しているしかない、というのが実情です」

「おかしいな。それならどうして、あなたがこの会見に同席されているんですか」

「石橋の指示ではございません。私と靖史君の兄とは大学の同級でございます。また、靖史君とは短いあいだとはいえ、同じ秘書仲間でもありました。その関係で、私が個人的に助力をしているだけでございます」

「そうそう。今回のことは、南が勝手にしてくれていることです。僕から頼んだわけじゃない」

「前回の強制猥褻の時も、君はそう言っていたね」

「そんな事件はありませんでしたよ。おおぜいの記者の前で、いい加減なことは言ってほしくないな」

「示談が成立したからといって、事件そのものが帳消しになるわけじゃないんだよ。君はこれまで数々の問題を起こし、そのたびに親父さんや周囲の人間に泣きついて、後始末をさせてきた。違うかい。車で当て逃げをして、友達を替え玉にしようとしたことがあったろう」

「あれは、友人から身代わりを買って出てくれたんですよ。僕は断ったのに」

「女性問題であやうく裁判沙汰になりかけたこともあった。この時はヤクザに監禁されて、足の指をつぶされている」

「相手の女が、あることないこと騒いでいただけですよ」

「バーで泥酔し、居合わせた客を殴ったこともあった。交際相手の女性を、違法ドラッグで死なせかけたこともあった」

「そんな噂話をいくらならなくても意味はありませんよ。ぜんぶでっちあげなんだから。親父の政敵が流しているらしいですよ。調べてみたらいかがですか」

「でたらめはやめなさい。そんな話、誰が信じると思う？」

「まあ、信じるという方が無理ですね。東京から流れてくるデマを、そのまま鵜呑みにして垂れ流すしか能がない皆さんだ。その、中央コンプレックスは何とかならないんですか。田舎新聞だからって、卑屈になるのはよくないですよ」

「お待ちください、話がそれているようです。いずれにしても、今回の行動は私の一存でしていることです。石橋ならばに石橋事務所とは、一切関係がありません。そのことは強調しておきたい」

「本当ですか。それなら確かめたいことがある」

「まだ続けるの？ さっきからあんたばかり喋ってますよ。これだけの記者さんが集まっているんだから、質問の機会は公平にしてさしあげたい」

「事故を起こしたクラウンは、石橋事務所所有の物だね。どうして君が、事務所の車を運転していたんだ」

「二台あるうちの一台を、ちょっと借りただけです」

「真夜中に？」

「夜中のドライブが好きなんです」

「自分の車を使えばいい。ご自慢のフェラーリがあるだろう」

「右ハンドルの練習をしたかったんです」

「そんな理由で、事務所が君に車を貸すかね。いったい誰に断って借りたの？」

「事務所の連中ですよ、もちろん」

「だから、誰から借りたのかって聞いているんだよ。真夜中だったんだろ？」

「しつこいなあ。じゃあ、教えてあげますよ。車は南から借りました」

「南さん、彼が言うことは本当ですか」

「え、ええ……」

「三日前といえ、あなたは東京におられたはずですね」

「いいえ、当日、遅い電車で戻っております」

「駅に着いたのは何時？」

「ははは、なんなの、これ？ 取り調べのつもり？」

「駅には何時に着いたんですか」

「午後9時ごろだったと思います」

「そこから事務所に向かわれたんですか」

「いえ、まっすぐ自宅に帰りました」

「おかしいですね。それでどうやって、靖史君に車を貸せるんですか。車のキーは、事務所に置いてあるんでしょう？」

「だから、南の家に行って事務所の鍵を借りたんだよ。事務所の近所だからね」

「靖史君、南さんを困らせてはいけません。彼の苦しそうな顔を見なさい。君は事務所に忍び込み、勝手に車を持ちだして、事故を起こしたんだろう。しかも、そのあとのことだつて、我々はちゃんと知っているんだよ」

「おやめください。その話は、この場ではご遠慮いただきたい」

「いいや、聞かせてもらおう。靖史君、君は今朝までどこにいた？ この栄町事務所まで、どこからやって来たんだ？」

「事故と関係ない話は、一切いたしません」

「君は今朝まで警察に拘留されていたんだろう。だから着替える暇がなかったんだ。事故を起こしたあと、現場近くのスナックに入って酒を飲み、泥酔したあげく大暴れして、駆けつけた警察官に連行されたんだね？」

「私から説明します。靖史君は事故を起こしてしまったあと、激しい動揺におそわれて、その気持ちを落ち着けようと、近くにある『すばる』というスナックに入りました。そこでつい飲み過ぎてしまい、店の主人から連絡を受けた警察官が、彼を署の方へ保護してくれた。そういうことです」

「保護ですか。ものは言いようです」

「事実です。靖史君は連行されたわけでも、拘留されていたわけでもないのです。保護を受けていただけです。そのところは、どうか正確に報道していただきたい」

「警察は、ただの酔っ払いを二日間も保護してくれるのかね」

「靖史君が体調をくずしてしまったので、休ませてもらっていたのです」

「そうとう派手に物を壊したと聞いていますかね」

「そちらについては、すべて弁償がすすんでおります」

「お得意の示談というわけですか」

「弁償をして、お許しをいただいたという事です」

「その交渉をしたのも、南さんでしょう。弁償の金だって、靖史君の懐から出ているとは思えない」

「この件は当事者間ですでに話し合いがすすんでおります。先方にご迷惑がかかってもしませんので、報道は控えていただきたい。よろしいですね」

「南さん、いいかげん、靖史君に振り回されるのはよしなさいよ。先生だって愛想をつかして親子の縁を切ったというのに、あなたがいつまでも引きずられていちゃ、しょうがないでしょう。選挙も近いのに、こんなことにまきこまれて、どうするの」

「ははあ、そういうことか」

「……何がおかしいんだ。私に変なことを言ったかい？」

「あんたが何にこだわっているのか、ようやくわかりましたよ。なるほどね」

「言っている意味がわからないね」

「僕としたことが、気がつくのが遅れて申し訳ない。わかりました、認めましょう。今回のことでは、親父にも事務所に非はない。すべて僕の責任です。南に借りたというのは嘘です。僕はあの晩遅く、誰もいなくなった事務所に忍び込んで、勝手に車を持ちだしたんです」

「どうやって事務所に入ったんだ」

「あそこはいつも、裏口の戸締まりが甘いんですよ。キーのある引き出しはわかっていただけ、ちよいと失敬して、気分良く乗り回していたら事故を起こしてしまった、というわけです」

「つまり、すべて君ひとりの責任ということだね」

「そう。すべて僕ひとりの責任です。親父も南も、被害者です。記事にはそのように書いてもらって結構ですよ」

「そういうことでいいですね、南さん」

「いえ、たとえ法的、道義的に責任はないものとしても……」

「南、もういいよ。せっかくのご厚意を無にしないほうがいい」

「ご厚意？ おかしな言い方はやめてくれ。私はただ、責任の所在を明確にしているだけだよ」

「いいよ、いいよ。悪いのは全部、僕ですよ。これを言わせればあんたは満足なんですよ。親父もいい取り巻きを持ったもんだ」

「何を言っているんだ。私は何も……」

「他の記者のみなさんも、今のやりとりを一語一句、正確に記事にしてあげてくださいよ。この人の顔のたつようにね。さあ、もういいでしょう。こんな茶番はお聞きにしよう。俺、もう疲れちゃったよ。……おい、南」

「それではみなさん、予定の時間をオーバーしておりますし、以上をもって会見を……」

「お待ちください。それでは約束が違えます」

「約束？ なんのことですか」

「こちらの方とは旧知のご関係のようですが、僕のようなフリーの若い記者にも、質問の機会は平等にいただきたい。先ほど靖史さんも、そのようにおっしゃったはずです」

「……靖史君、どうする？」

「でも、これ以上なにを聞かれてもねえ。同じ答しかできませんよ」

「いいえ、僕がお尋ねしたいのは、もっと別のことです」

「そう。それじゃあ、ちよっとだけならいいですよ」

「では、できるだけ手短にお願います」

「わかりました。先ほど南さんは、重大な法律違反はなかったとおっしゃった。あれは本当ですか」

「本当です。『すばる』のオーナー様からも、被害届は出さないとおっしゃっていたのであります」

「そのことを言っているわけではありません。靖史さん、あなたはあの晩、本当は事故を起こす前から酒を飲んでいたのでありませんか？ いや、酒に酔っていたことが、事故の

原因だったのではありませんか？　そして、ここまで話題に出ていない、もっと別の事件も起こしているのでは？」

○午後1時15分　二番目の記者

「何をおっしゃるのですか。そういう事実はありません」

「本当ですか」

「警察からも、そのような疑いはかけられておりません」

「信じられませんね。あのような事故で、ドライバーの飲酒を疑わない警官などいるでしょうか。ましてや事故直後に、泥酔した状態で連行されているのに」

「連行という表現は控えていただきたいと、先ほど申し上げたはずだが」

「十人入れれば一杯の小さな店で、窓を割り、テーブルや椅子を破壊して、駆けつけた警官につれていかれているのです。これを連行と言わずに、何とこののですか」

「警察が『保護』という言葉を使っているのです。あなたも記者なら、表現は正確にお願いしたい。それに、靖史君が保護されたのは、事故直後ではありません。よく調べたい」

「存じております。大きな音がしたという近隣住民の通報を受けて、警察が事故車を発見したのが午前0時。靖史さんの『保護』が、午前3時です」

「3時間後の出来事を、普通、直後とは言わないでしょう。そもそも警察は、靖史君が事故車の運転手だということを、翌日まで知らなかったのです」

「それはまた、うかつな話ですね」

「ナンバーを照会して、うちの車だということにはわかっていたので、当然ドライバーも、うちの職員だと思っていそうですよ。翌朝、靖史君自身が供述するまでは」

「それも信じがたい。警察が、靖史さんと先生の関係を知らなかったはずはないし、事故現場とスナック『すばる』は、目と鼻の距離ではありませんか。本人が申し出るまでこの両者をむすびつけて考えもしなかった、というのですか」

「交通事故と泥酔者の保護とで、あつかう部署が違うからでは？　いずれにしても、靖史君も私も、警察からは飲酒運転についての質問等は、いっさい受けておりません」

「だからといって、飲酒運転の事実がなかったという証明にはなりません。状況証拠から見れば、あきらかにクロだ」

「いったい何を根拠に、そのように決めつけるのですか」

「前列があるのです。靖史さんは大学生のころ、東京で、今回とまったく同じような事件を起こしている」

「なんだ、また昔のことを蒸し返すの？　もういい加減にしてくれないかな」

「場所は新宿でした。酒に酔って物損事故を起こしたあと、警察が来る前に近くのバーに飛び込んで、飲酒運転をカモフラージュしようとした。そうでしたかね？」

「憶測や伝聞で、ものを言ってほしくないんだよね」

「伝聞ではありません。僕は当時、直接この耳で聞いています」

「へえ、あんた東京の人なんだ。どうりで見かけない顔だと思った」

「あの頃、僕はあなたと同じ大学にいました」

「なんだ、あんた、俺の後輩なの。だったらもう少し、先輩には敬意をはらってもらいたいもんだね」

「あなたの車に同乗していた女性からも、僕は直接この話を聞いています」

「あいつとは、そのころ別れ話が進んでいたんだよ。それで逆恨みされた。方々に、あることないこと吹聴されて、ずいぶん迷惑した」

「恨みもするでしょう。この件では彼女もまた、飲酒運転の幫助の容疑で、警察から事情を聞かれています」

「結局は、お咎めなしだったよ。彼女も僕も」

「それで味をしめて、今回も同じ手を使った、というわけですか」

「…：おい、なんだと？」

「いかん。靖史君、落ち着きなさい」

「言葉に気をつけろよ。そんな出所不明の噂を根拠に、俺に濡れ衣をきせるつもりか」

「靖史君、冷静になりなさい」

「うるさいな。偉そうに、上からものを言うのはよしてくれ。まったく、あんたの言うことをきくと、ろくなことがない。どうしても会見をしろというから、仕方なくやってみたら、このザマだ」

「南さんを責めるのはお門違いです。飲酒運転でないというなら、どうしてあんな場所で事故を起こしたのですか」

「事故なんて、場所を選んで起こすもんじゃないだろう」

「あそこは堤防沿いの長い一本道で、とちゅうに曲がれる道もなく、廃工場の裏門で行き止まりです。鉄格子の門扉には真っ赤に錆ついた南京錠がかかっている、中に入ることはできません。あなたはその門柱に車を激突させた。いったい何が目的で、そんな道を走っていたのですか」

「うっかり迷い込んだだけだよ。深夜のドライブに、目的なんかあるもんか」

「ブレーキもかけずに門柱に突っ込んだ理由は？ まさか自殺をはかったわけでもないでしょう」

「それが、酒を飲んでいたらと疑う根拠？ あきれたね」

「すくなくとも、正常な判断能力があったとは思えない行動です」

「人の通わない一本道で、気持ちよく走っていたらうっかりスピードを出しすぎた。それだけのことだよ」

「一本道では、右ハンドルの練習にはなりません」

「あの道へたどり着く前に、町中走りまわったんだよ。その間は、なにも事故を起こしていないんだから、これは僕が酔っていなかったという証拠じゃないか」

「町中とおっしゃるが、事務所と事故現場は、そんなに離れてはいませんか。高洲東の事務所から大通りに出て、中川大橋の手前で右に曲がれば、そこがもう、例の一本道です」

「まっすぐそこへ向かったわけじゃない。その前に、あちこち走っていたんだ」

「具体的にどのあたりを？」

「いちいち憶えてないね」

「酔っていたから憶えていないのでは？」

「そうじゃない。まあ、だいたい高洲東のエリアだろうよ。橋はわたっていないから」

「高洲東のエリア……確かですね？」

「失礼ですが、このようなやりとりを繰り返しても、水掛け論にしかならないと思いますよ。どちらにしろ、何も証明できないのですから」

「いいえ。本題はここからです。靖史さんは警察にいたるあいだ、新聞を読んだり、ニュースを見たりされましたか」

「いや。腹痛でウンウンうなっていたからね」

「では、高洲東小学校で起こった事件については、ご存じありませんか」

「ちよつと、あなた、いきなり何を言い出すんですか！」

「小学校の事件？ いったい、何のこと？」

「あなたが事故を起こしたのと同じ夜、何者かが高洲東小学校の生け垣を突き破り、車で侵入したのです。犯人は校庭中を走りまわり、花壇や畑を踏みつぶし、動物小屋の鶏やウサギを一匹のこらず轢き殺して、去って行きました」

「……待ってくれ、それが俺の作業だっていうのか？」

「門の植え込みの中には、ジャックダニエルの空き瓶がころがっていたそうです」

「冗談じゃない！ 馬鹿も休み休み言ってくれ。誰がそんな、キチガイみたいな真似をするか」

「事故の前に高洲東を走り回っていたと、たった今あなたご自身がお認めになった。動物の虐殺と、自殺行為にも似た正面衝突。同じ晩に、同じ町内で、常軌を逸したドライバーが二人もいたことになる。この両者が同一人物かもしれないと疑いをもつのは当然です」

「ふざけるな。こいつは名誉毀損だ。おおぜいの記者の前で、そんなことを言っただけですむと思っているのか」

「疑いをもつのは当然だと言っているんです。むしろ、このことをどうして他の記者の方が質問されないのか、不思議でならない」

「そこまで言うなら、車を調べてみる。動物を轢き殺したっていうんなら、なんらかの痕跡が残っているはずだろう」

「ところが校庭には脛くらいの深さの小さな池があって、犯人はその上を何度も走行しているんですよ。痕跡は、洗い流されてしまった可能性があります」

「そんなこと知るかよ。お前、本気で俺のことをキチガイ扱いするつもりなのか」

「大学時代、あなたは議員二世ということで、学校の中でも有名人だった。僕もいろいろ評判を聞きました。そのほとんどが、酒で自分を見失ったあげくの乱暴狼藉、という話だった。気が狂っていると思いませんが、泥酔した時のあなたなら、小学校に押し入るくらいやりかねません。現にスナック『すばる』でも、設備や備品をめっちゃめちゃに破壊しているではありませんか」

「お待ちください。あなたの話は、その点がおかしい」

「どういう点がでしょう？」

「靖史君は飲酒運転をごまかすためにスナックに入ったのだと、あなたはおっしゃった。だとしたら、そこでまた乱暴をはたらいて、わざわざ警察沙汰を起こすのはおかしいじゃないませんか」

「事故を起こしてから3時間も飲んでいたので。すっかり酔っ払って、最初の目的を忘れてしまったのかもしれない」

「そもそも靖史君には、飲酒運転をごまかす必要はなかったのです。事故現場は、深夜の廃工場前ですよ。ごまかそうにも、周囲には誰もいない」

「間を置かず警官がやってくることは、予想できたはずですよ」

「だとしても、私なら、店をさがして酒を飲んだりしない。そのまま家まで逃げて帰ります。靖史君の自宅は高洲西で、川の向こうになります。歩いて帰れない距離じゃない」

「酔って歩行がおぼつかなければ、それもかまいません」

「それではスナックの従業員の方にお尋ねになったらいかがですか。入店時に、靖史君がすでに酔っていたかどうか」

「ところが『すばる』は、昨日から閉まっているのです。女主人は店の女子二人をつれて、二週間のヨーロッパ旅行に出掛けたとか。常連客の話では、何のまえぶれもなく突然に、バタバタとあわただしく出掛けていったそうですよ」

「へっ、それは残念だったな」

「このことも、僕にはどうも、タイミングがよすぎるように思われてなりません。いったい、店の被害額はいくらだったのですか？ それに対して支払われた弁償金の額は？ その金額に、別の意味も含まれていたのでは？」

「別の意味とは何ですか。お渡ししたお金を何に使われようと、私の預かり知るところではありません。タイミングが良すぎるという意味も、私にはわからない」

「実際に、彼らの証言が得られないことにより、飲酒運転の事実が確認できなくなっているではありませんか」

「証言を封じるために、私が海外旅行を提供したと？ そんなことをして、何になりますか。彼らだって、永久に旅行に行っているわけではないでしょう」

「しかし時間稼ぎにはなります。世間の関心など、二週間もすれば薄れてしまう。議員秘書のあなたなら、そのあたりの機微はよくおわかりのはずだ」

「それは邪推というものです」

「考えてもみてください。夜中の0時に突然、盗んだ車で右ハンドルの練習だなんて、シラフの人間の思いつきでしょうか」

「0時というのは事故を起こした時刻であって、車を持ちだした時刻ではありませんよ」

「では靖史さん、あなたが車を持ちだしたのは、何時でしたか」

「答えたくないね」

「なぜです」

「そんな下手くそな誘導尋問にひっかかると思うか？ 答えてほしけりゃ、先にそっちが時間を言えよ」

「何の時間ですか」

「小学校で起こった事件のだよ」

「お教えしたら、それよりも遅い時刻をお答えになるつもりでは？」

「お前だって、その逆をやるうとしてるんじゃないのか」

「小学校の事件の発生時刻は、まだ正確にわかっているのです。契約している警備会社のセキュリティは校舎だけが対象で、校庭には警報装置がついていなかったのです。しかし、近隣の住民に物音を聞いたという人がいて、およその時間はわかっています。だいたい午後11時30分くらいのことですよ」

「そうかい。よくわかった。でも、俺は答えないよ。答えたくても憶えていないのさ。あんまり時間にはこだわらない方でね」

「そのお答えでは納得する者が、どれだけいるとお思いですか」

「納得させる必要なんかない。疑っているのは、あんただけだよ」

「今は、そうかもしれない。しかし、小学校の事件の犯人が捕まらなければ、警察と世間の目は、かならずあなたに向きますよ」

「どうでもいいよ。僕をよく知る人なら、僕を疑ったりはしない。さっき、ウイスキーの瓶が落ちていたと言ったろう。残念ながら、僕はウイスキーは飲まないんだよ。……さあ、もう充分だろう。これ以上やったところで、何も出てきやしないよ。それよりそっちの記者さんが、さっきから手をあげている」

「まだ話のとちゅうです。こちらが決着してからにしてください」

「残念ながら、質問の機会は平等にという約束なもんでね。……そっちの人、お待たせしました、何でも聞いてください。ただし、馬鹿げた誹謗中傷はご免だよ」

「もちろんですとも。私は飲酒運転にも、小学校の事件にも、ぜんぜん興味はありません。ご安心ください」

「たいへん結構だね」

「うかがいたいのは、もっと別のことなんです。それも、どちらかといえば南さんにお尋ねしたいんですが」

「私に？」

「石橋議員の秘書をしておられる尾口久子さんが、行方不明だそうですね。靖史さんが事故を起こしたちようどその晩から、ぱったり消息がわからないとか」

○午後1時30分 最初の記者と二番目の記者

「尾口さんが行方不明ですって？」

「南さん、それは本当なのか」

「い、いや、その件については、お答えしかねる。会見の趣旨にそわなにご質問はご遠慮いただきたい。……あなた、突然なにを言い出すのですか」

「最初にお詫びをしておきます。この状況でこれをお尋ねするのは、こちらとしても心苦しい。しかし、私はひよんなことから情報をつかんでしまった。つかんでしまった以上、お尋ねしないわけにはいかなないのでねえ」

「いったい、どこからお聞きになったのです。このことはまだ、ごく一部の人間しか知らないはずなのに」

「それはお話しするわけにはいかないんです。すみません」

「尾口さんといえば、たしかお父上は石橋議員の後援会長でしたね。会社をいくつも持っている、商工会議所の会頭も務めておられる」

「あの子は東京事務所の勤務だったはずだ。こっちへ戻ってきていたの？ それとも向こうで行方不明になったのか。まさか誘拐なんてことはないんだろうね」

「わかりません。お話しできることは、なにもありません。……あなた、どういうおつもりですか。よりによって、こんな場所で、だしぬけに。事情をご存じなら、もっと配慮し

てくださいってもいいでしょう」

「いや、それは違うよ、南さん。この人の言ったことは正しい。我々は記者だ。情報を知ってしまったからには、それを追及しないわけにはいかない」

「私たちも、ここで聞いてしまったからには、あとには引けません」

「勝手なことを言われても困ります。この問題の公表は、私ひとりでの判断で決められることではない。警察とも相談しなければ」

「すると、もう警察は動いているのか」

「いや、お答えできません。いまは何を聞かれても、そう繰り返すしかない」

「南さん、ここはよくお考えになるべきです。あなたとしては関係者に箝口令をしいたつもりなのでしょうが、現にこちらの方に情報が漏れています。今後漏れるでしょう。秘密にしておくことなど、できません」

「だからといって、ここですべて話してしまえ、ということにはならないでしょう」

「そうではありません。それならばいっそのこと、我々が集まっているこの場ですべて公表し、かわりに報道協定を結んだ方がいい、と申し上げているのです」

「……」

「こういう時だからこそ、我々を味方につけるべきです。それが、尾口さんのためでもあると思います」

「……しかし、この中にはあなたをはじめ、私がよく知らない方々もおられる。率直に申し上げて、どこまで信用してよいか、わからない」

「ご心配にはおよびません。協定を破るような記者はおりませんよ。そんなことをしたら信用を失って、二度とこの世界で生きていけないわけですから」

「……どう思われますか？」

「こちらのご意見に賛成だ。ここでシラを切り通しても、あとのマスコミ対応が面倒になるだけだよ。俺が言うのもおかしいがね」

「……尾口の安否がわかるまで、ここで聞いた話は絶対に記事にしないと、約束していただけですか？」

「もちろんです」

「やむをえません。お話ししましょう。ただし警察への取材は、私が了解するまでは控えていただきます。私以外の事務所スタッフへの取材も、お断りします」

「いいでしょう」

「……では、できるだけ簡潔にお話しさせていただきます。石橋の私設秘書である尾口久子が、三日前の夜から行方不明になっております。彼女は当日、選挙の準備のために東京からこちらに戻ってきておりました。昼過ぎにこちらについて、実家に帰郷の挨拶をしたあと、夜まで高洲東の事務所です仕事をしております。職員全員で出前の食事をとり、私が電話で申しつけた用を足すために外出したのが、午後7時30分。それが彼女の姿が確認された最後です。以降、現在にいたるまで、連絡はとれておりません。……いまの段階でお話できることは、以上です」

「行方不明とわかったのは、いつの時点ですか」

「翌日です」

「それまで誰も気がつかなかったの？」

「直帰の予定で事務所を出ていたため、彼女が戻ってこないことを誰も不審に追わなかったのです。朝になって、彼女が出勤してこないため職員が実家に問い合わせ、そこで行方不明になっていることがわかりました。ご両親は、徹夜で仕事をしていると思いい込んでいたそうです」

「携帯電話は？」

「電源が切つてあるようで、まったく通じません」

「東京に帰っているというのではないんだらうね」

「向こうの職員に確認させましたが、マンションには戻っていないようです」

「あの子のことだ。どこかへ勝手に飛んでしまったんじゃないのかね」

「それはないでしょう。うちへ来てからは、真面目に仕事をしていましたから」

「……どこかへ飛んで？ それはどういう意味ですか？」

「久子さんは高校生時代、あまり素行がよくなかったんだよ。心配した父親が全寮制の学校に転校させ、東京の大学に行つてからは多少落ち着いたようだったが、それでも安心出来ずに、卒業後は石橋事務所にあずけていたんです」

「社会の厳しさを学ばせたいとのことでしたが、そんな必要はありませんでした。頭のいい、機転のきく子で、しっかり働いてくれましたから」

「警察へは、もう届けているのですね」

「ええ。捜索も、すではじめていただいています。ですが今のところ、手がかりはまったくない状態です」

「脅迫状や、身代金の要求は？」

「届いておりません」

「彼女は事務所を出て、どこへ、何をしに行ったの？」

「たいした用ではありません。物置部屋に保管してある書籍を、この栄町事務所に運んでおくように指示をしたのです。叢書のたぐいですが、近々テレビのインタビューが入るので、その背景用にと考えたのです」

「物置部屋というと、みんなが『離れ』と呼んでいる、あの部屋のことかい」

「そうです。高洲西にある、末広ビルという雑居ビルの一室です。この栄町事務所に通越してくるまで、事務所の分室として使っていた部屋です。今は不要品を保管しておく物置になっていて、滅多に人の出入りはありません」

「『離れ』は、もう調べてみたんだらうね」

「もちろん。翌日私が探しにいきましたが、尾口はおりませんでした」

「運ぶはずの本は、残されたまま？」

「いいえ。指示した本は、すべて棚からなくなっていました」

「すると『離れ』に来ることは来たわけだ。いなくなったのは、本の搬出をすませたあと、ということだね」

「ところが、運びこまれたはずの本が、こちらには見当たらないのです」

「では、末広ビルからこの事務所へ向かう途中で、彼女の身に何かが起こったと」

「そうかもしれないませんが、今の段階では何とも申せません」

「警察が捜索を始めているとおっしゃいましたが、具体的にはどのような？」

「現時点では、尾口を探してまわる私に刑事さんが同行してくださる、といったていどの

ことです」

「南さん、あなたのことだから、例の店の防犯カメラはもう確認したんだろうね」

「あ、いや、その話は、いまは勘弁してください……」

「防犯カメラ？ 何ですか、それは？」

「末広ビルの向かいに、コンビニエンス・ストアがあるんですよ。半年ほど前に、その店が強盗の被害にあってね。店に入ってくる犯人の姿を捉えた防犯カメラの映像が、マスコミに公開された。その映像に、末広ビルの入り口が写っていたんです。南さんなら、それを憶えているだろうと思っただけ」

「その質問は困ります。お答えできる範疇を超えている。何度も言うようですが、具体的な捜索の模様について、ここで話してよいかどうかの判断が、私にはつかないのです」

「大丈夫だよ、南さん。我々が黙っていれば、警察にもわかりやしない。防犯カメラは調べてみたんだね？」

「……ええ。私ではなく、帯同して下さっている刑事さんが手配写真のことを憶えているのです。そこでコンビニエンス・ストアへ行き、店長さんに事情を話して協力してもらい、店舗の奥の事務室で映像を確認しました」

「尾口さんは写っていたかい」

「それが、はっきりとはわからないのです。それらしい姿、つまり、ベレー帽をかぶった女性がビルに入っていく姿は写っておりましたが」

「そういえば、彼女はいつもベレー帽をかぶっていたな」

「いかんせん画像が不鮮明で、それを尾口だとは断定することはできませんでした」

「その人物が写っていた時刻は？」

「午後7時40分でした。事務所を出たのが7時30分ということでしたから、時間的には符合します」

「10分で到着したとすれば、車を使ったということか。たしか、末広ビルは裏手が駐車場になっていたね。尾口さんの車は残されていた？」

「いいえ」

「石橋事務所に、車は何台あったっけ」

「二台です。しかしそのどちらも、尾口が使っていないことははっきりしています。一台は事務所の駐車場に置かれたままでしたし、もう一台はその晩、靖史君が事故を起こしているわけですから」

「彼女は、自分の車は持っていなかったんですね」

「ええ。ですから、おそらくタクシーを使ったのだと思います」

「すると、本を運んでくるまでのあいだ、そのタクシーをビルの前で待たせていたかもしれませんね」

「ところがそのような車は、防犯カメラには写っていませんでした」

「尾口さんがビルから出てくるところは？」

「写っていたのかもしれませんが、よくわかりません」

「どういうことですか」

「少なくとも、ベレー帽を被った女性の姿は、それ以降の映像にはまったく出てきませんでした。しかし、彼女が帽子を脱いでいたとすれば、もう判別はできません。繰り返しま

すが、それほど鮮明な映像ではありませんでしたので」

「人の出入り自体はあったわけですか」

「あのビルは、深夜も営業している飲食店がテナントとして入っています。人の出入りは終夜におよび、防犯カメラにもそういった人の姿が多数写っておりまして」

「その中の一人が、尾口さんかもしれないと」

「なんともいえません」

「ビルの中にいない以上、外へ出ていく姿はかならずカメラに写っているはずですね」

「そうとも言いきれないのです。コンビニエンス・ストアのカメラから、通りの向かいを見ているわけですからね。店の前に車が駐車しているあいだは、視界が遮られてしまいます。通りを車が通過しているあいだも、向こう側は写りません」

「それもそうですね」

「そもそも、店の前の歩道には配電ボックスがあり、末広ビル入口の前には消火栓があります。このふたつに邪魔をされて。映像に写っているのは入口の一部分にすぎないのです。人の出入りを漏らさず記録しているというわけではありません。結局は、何も確定的なことはいえないということです」

「隣のビルとの隙間に、転落して怪我をしているということはありませんか」

「それはありません。ビル周辺は、警察の方に調べていただきました」

「他の階のテナントは？」

「それも警察の方が。もちろん、行方不明者の搜索とは言わず、何か別の口実を作ってくれたようですが、手がかりにつながるようなものは、何ひとつ見つかっておりません」

「尾口さんのお父上は、きぞご心配のことでしょうか」

「だと思いません。私はまだ、きちんと話せていないんですよ。なんやかやと忙しくて」

「そうか。南さんはこの二日間、靖史君と尾口さんの二本立てだったわけだ」

「とにかく今は、無事で見つかったことを祈るのみです。……現時点でお話しできることは、以上です。本当に、何もわかっていないものですから」

「わかりました。新展開があれば、その時は教えていただけませんか」

「そのかわり、みなさんも約束を守っていただきたい。尾口の安全にかかわることですので、くれぐれもお願ひします」

「すみません。そろそろ私にも質問をさせてください。言い出しっぺの私のがけものはひどい」

「いえ、そのようなつもりはありません。質問をどうぞ、ただし、できるだけ簡潔にお願ひします」

「心得ております。……といっても、知りたいことの大部分はこちらの方が質問してくださいましたので、私は靖史さんにお聞きしようかな」

「……ん？ 僕？」

「靖史さんはいつ、このことをお聞きになりましたか」

「知りませんでしたよ、いまはじめて聞いて、びっくりしているところです」

「靖史君には、このことは話していませんでした」

「どうしてですか？」

「どうして……彼には関係のないことですから」

「そうですか？ 尾口さんとは、かなりお親しい間柄だと聞いていますが」

「親しくなんかないですよ。誰がそんなことを言ったのかな」

「お二人は、同じ高校の出身でしたね。尾口さんが二年後輩だったそうですが」

「それだけのことですよ」

「交際されていたとうかがいましたけど」

「とんでもない」

「写真も見せてもらいました」

「誰から？」

「当時のお仲間から。ずいぶん仲がよさそうだったけどなあ」

「あなた、僕のこと調べているの？」

「滅相ありません。ちよっと取材させてもらっただけです。私は地元の記事でも、大学の後輩でもありませんのでね。……それよりも、尾口さんのことですが」

「僕らのグループの周りには、取り巻きの女の子が何人か、いつもまとわりついてたんですよ。誘ったわけでもないのにね。彼女もその中のひとりだっただけです」

「万引きや喧嘩で、いっしょに警察の厄介になることもあったとか」

「まあ、反抗期というやつです。誰にでもあるでしょ」

「それで彼女のお父さんは、久子さんを転校させたりしたわけですね」

「そういうこと。彼女とは、それっきりですよ」

「しかしあなたも彼女も、東京の大学に進学されている。それについて去年まで、石橋議員の秘書仲間だったんじゃないやありませんか」

「向こうでは、顔を合わせたことは一度もなかったな。彼女が親父の秘書になったのは、僕が辞めたあとですから。彼女とは高校以来、会っていません。……こんな話、今するのかなあ」

「ああ、いえ、お知り合いなら、さぞかしご心痛のことと思われています」

「それはどうも。でも、あんまり心配することもないんじゃないかな。そのうちどこから、ひよっこり現れますよ。そんな感じの子ですから」

「なるほど、そうかもしれない。しかし、おかしいなあ」

「なにが？」

「あなたのおっしゃっていることが、です。三日前の夜、あなたは『離れ』で、尾口さんとお会いになっているはずなんだが」

○午後1時45分 三番目の記者

「……は？ なんですって？」

「三日前、あなたは尾口さんと会っている、と申し上げたんです」

「知りませんね。それ、どこからの情報？ 誰がそんなことを言ってるの？」

「このことは、南さんもご存じのはずですよ。尾口さんがビルに入っていく10分前、女性を同伴した靖史さんがビルに入っていく姿が、カメラに写っていたでしょう」

「……あなた、あの映像をご覧になったんですか」

「直接見たわけではありません。ただ、見たという人から話を聞きました」

「あの内容は、私の他は警察の方と、店長しか知らないはずだが……」

「その中の誰かかもしれないし、違いかもしれませんが。情報源は明かせませんが、話ばかり詳細に聞かせてもらっております。午後7時30分、映像の左手、つまり繁華街のほうから一組の男女が現れて、ビルの前で立ち止まったんだそうです。二人はしばらく揉み合ったあと、並んでビルへと入っていったといいます。ためらう女性を、男性が説得しているように見えたということなんですが」

「その男が、僕だって言うの？」

「そう聞きました」

「ずいぶん断定的なんだな。映像は不鮮明だったんじゃないんですか」

「靖史さんは、左足の怪我が原因で、歩き方が特徴的なんだそうですね。知っている人が見れば、すぐあなただとわかるんだとか。……いかがでしょう。映像をご覧になった南さんも、否定はされていないようですが」

「入るにははいりましたがね。行き先は『離れ』じゃないよ。当たり前でしょう。ようやく口説き落とした女の子を、どうして物置につれていかなきゃならないの」

「私もそう思っただけです。ところがですね。二階のバー、五階と六階のスナック、いずれも靖史さんはあの晩、やってこなかったと言っているんですよ。ついでに四階の歯医者も」

「……へえ。あなた、わざわざ確かめに行ったの」

「それに、あそこはただの物置部屋じゃない。これも南さんは、ご存じですね。尾口さんを探しに行った時、ダブルベッドや冷蔵庫が運びこまれているのをご覧になったはずだ。靖史さんは以前からこの部屋を、まるで別宅のようにして使っておられた。主に女性とごす目的で」

「どうしてそう言い切れます？」

「あなたから『離れ』へ誘われた女性たちに、直接会って聞きました」

「……なんだって？」

「あの晩の、あなたのお相手が見つけたようと思って、繁華街の店という店を、片っ端からあたってみただけです。残念ながら該当する女性は発見できませんでしたが、そのかわり、今まであなたに『離れ』へつれていかれたという女性がゾロゾロ見つかって、ついでにいろいろお話をうかがってきたようなわけですね」

「ふーん、そういうことか。わかりましたよ。ばれちゃしょうがないね」

「お認めいただけますか」

「『離れ』の合い鍵をこっそり作って、時々使っていたことは事実ですよ。自宅は、別居中のカミさんがいつ帰ってくるかわからない。ホテル代も馬鹿にならない。『離れ』なら、どうせ誰も使っていないし、事務所の中も南さんも、このていどのことで目くじらはたてないと思っただけ。べつに法律違反じゃないでしょう。ま、不法侵入にはなるのかな」

「それだけではすまないかもしれないねえ。女性の中には、おかしな薬をあなたに飲まされてひどい目に遭った、と訴えている人もいます」

「違法なものを使っていたわけじゃありませんよ。それに本人も合意のうえだった。いずれにしても、もう薬はやってません」

「三日前の夜も？」

「やってません。そんな間もなかった。あの晩は結局、女の子に逃げられちゃったから」

「そのようですね。あなた方が入っていった15分後、ビルから飛び出して走り去って行く女性の姿が、防犯カメラにも写っていたそうです」

「そうでしょう」

「問題は、その5分前に尾口さんがビルの中に入っている、ということなんです。つまり、あなたたちは『離れ』で鉢合わせになった。女性は、尾口さんに驚いて逃げ出したんです。そしてあとには、あなたと尾口さんだけが部屋に残った。違いますか」

「……まあ、そうなるんだろうね」

「尾口さんとは高校の日以来、会っていないはずでは？」

「あれは会ったうちに入りませんよ。すれちがいざまに挨拶をしたただけだから」

「すれちがい？」

「僕もすぐに部屋を出て行っただけですよ。逃げた女を追いかけてね」

「尾口さんを残してですか。せっかく懐かしいお友達と再会したのに」

「ぼったり出くわせば、案外そんなものですよ。特別仲がよかったわけでもないし」

「変だなあ。すぐに女性を追いかけたなら、あなたもカメラに写っていると思うんですが、そうは聞かなかった」

「よく見えなかったんでしょう。南さんも言っていたじゃないか。ビルの入口は部分的にしか写っていなかったって。ましてや車が駐まろうものなら、なんにも写らなくなるわけでしょう」

「ですが、ビルの前には消火栓がありますからねえ。誰も車は駐めないんじゃないかなあ。私が聞いた話では、あの晩はどういう偶然か、コンビニの前に駐車する車もほとんどなく、ビルの出入口はほぼ一晩中、カメラに写りっぱなしになっていたというんです。そうです、南さん」

「なんとも言えません。私は、尾口のことだけに注目しておりましたから」

「逃げ出した女性は、追いかけてつかまえることができましたか」

「いや、外に出たとたん、追いかけるのを止めました。そこまでの女じゃないって、思いなおしてね」

「そのあとは？」

「どうしたかなあ。よく憶えていませんね。夜の町を、フラフラしてました。もちろん、酒は飲んでませんよ」

「それから、高洲東の事務所へ行って、車を持ちました？」

「そうなるね」

「何時頃？」

「その質問には答えないと、さっきも言いましたよ」

「ああ、そうでしたね。失礼しました」

「とにかく、僕は尾口さんを残してビルを出たんだ。そうでなきゃ、川向こうで自動車事故は起こせない」

「もちろん、あなたがビルから出て行ったということは疑っておりません。その姿も、ちゃんとカメラに写っていたそうです。ただその時刻が、あなたがおっしゃるよりも、ずっと遅い時刻だった。しかし、そのことは後でお話ししましょう。ここで大事なのは、尾口さんと会ったことを靖史さんがお認めになった、ということですよ。つまり、失踪前の彼女

に最後にあった人物は、石橋靖史さんだった、ということになります」

「……なんだか引っかかる言い方をするね」

「気に障ったらお詫びします。ひとつ確かめさせてください。ドライブをするために事務所の手を持ちだした時、駐車場に車は二台ともありましたか？」

「ありましたよ、二台とも」

「そうですか。おかしいなあ。そんなはずはないんだが」

「どうして」

「目撃者がいるんですよ。午後11時頃、ビルの駐車場にクラウンが駐まっているのを見た、という人がいるんです」

「信じられないね。そんな人、どうやって見つけたんですか」

「末広ビルに取材に行った時、私は三階の『離れ』の前にも行って見たんです。むろん、中には入れませんでした。ところが、ドアの郵便受けに、一枚のチラシが突っ込んであるのを見つけた。手にとってみると、今月いっぱい割引券のついた、ピザ屋のチラシでした」

「それが何ですか。めずらしくもない」

「他のテナントは、そんなもの受け取ってないと言うんですよ。あのビルは、出入口に『ポスティングお断り』の貼り紙がしてありますね。だから玄関ドアに突っ込んであったチラシは、宣伝のためにむやみに配って歩いた物じゃない。気になったので。電話して聞いてみたんです」

「ピザ屋に？ あんたもよく暇なんだねえ」

「すると、その店長が何と言ったと思います。三日前の夜、末広ビル三階から、ピザの注文があったっていうんですよ。時間は、午後10時15分。電話をかけてきたのは、若い女性だったそうです。南さん、『離れ』に電話はひいてありますか？」

「……ええ。分室として使用していた時の固定電話が、契約したままになっていました」
「店長が言うには、その女性、ひどく酩酊していたそうです。酩酊と言うよりは異常な躁状態というか、あまりにも調子が外れているので、何かおかしな薬でもやっているんじゃないかと、直感的にそう思ったというんです」

「……」

「しばらくして、アルバイトの店員が配達にきました。しかし、玄関のチャイムを鳴らしても、応答がない。裏の駐車場へまわって窓を見上げると……彼がクラウンを目撃したのはこの時ですが……三階の明かりがすべて消えている。店長から部屋に電話をかけてもらったが、誰も出ない。さてはイタズラ電話かとあきらめて帰ろうとしたが、最後にもういちど裏へまわってみた。すると今度は、部屋の明かりがついていた。ようするに、居留守を使われていたんですね」

「……」

「三階へ駆けあがってチャイムを鳴らす。何度も鳴らしていると、ようやくドアが薄く開いた。出てきたのは男だったそうです。チェーンロックはかけたまま。中が暗くて人相はよくわからなかったが、息は酒臭かった。ドアを開けてくれないので、ピザの箱を縦にして隙間から渡した。男はぬっと腕を突き出して金をはらうと、釣りはいらぬといって乱暴にドアを閉めた。店員は、わたしそびれたチラシを郵便受けに突っ込んで帰って行った。

これが、午後10時45分から11時にかけての出来事だそうです。この右往左往するピザ屋の店員も、防犯カメラに写っていたと思います。」

「見たかと尋ねられれば見ましたが、時刻など憶えておりませんし、ましてや、どの部屋が目的だったのかなど、わかるはずがありません。とにかく私は、ベレー帽の女性が出て行くところにしか注意していませんでしたから」

「しかし、結局は写っていないかった」

「そうです」

「南さんは、トータルで何時間分の映像をご覧になったんですか」

「尾口がいなくなった晩の午後7時から、翌日の午後1時までの分です。むろん、人が写っていないところは早送りでした」

「翌日の午後1時で、見るのをやめた理由は？」

「その時刻が、私と刑事さんがコンビニエンス・ストアを訪れた時刻だからです。店の入り口に私たちの姿が写ったところで、映像を止めてもらいました。それ以上見ても意味がありませんので」

「その時点で、ビル内の搜索はすんでいたからですね」

「そうです」

「つまり、午後1時以降に尾口さんがビルから出てきた可能性もない。彼女はとうとう、外に出てこなかったことになる。不思議ですね。午後11時にクラウンは駐車場にいった。ということは、尾口さんも『離れ』にいた。しかし夜が明けてみたら、車は事務所の駐車場に帰っており、尾口さんはビルの中で煙のように消えてしまった」

「そのようなことはありません。先ほども申しましたように、もし彼女がベレー帽を脱いでいたとしたら、映像からはそれがわからないのですよ」

「でも、彼女はベレー帽を脱がなかったと思いますよ。とくに屋外では。その理由は何故のほずです。あなたも、南さんも」

「……彼女の頭の傷のことをおっしゃっているのですか」

「ええ。高校生の時、喧嘩の乱闘にまきこまれて出来てしまった傷らしいですね」

「あんな傷、たいして目立ちませんよ」

「傷は目立たなくても、その周囲に毛髪が生えないとなれば、女性なら平気ではいられないと思います」

「そのとおりです。だから彼女は部分髪をつけていました。ですから、べつだん帽子を脱ぐことをいやがる理由はありません。とにかく、物理的に考えても、尾口はどこかのタイミングで、ビルの外に出て行ったはずですよ」

「それに、クラウンなんて、町を探せばいくらでも走ってるじゃないか。ピザ屋が見たのは、事務所の車じゃなかったんだよ」

「しかし、高洲東の事務所から末広ビルまでは、中川をへだてて5キロはあります。夜の7時半に女性がひとり、歩いていこうとは思わないでしょう。本を運ぶという用事を考えても、車を使ったことは間違いないと思うんですが」

「だから、タクシーを使ったんじゃないの」

「目の前に、使える車が二台もあるのに？」

「その時は、誰かが使っていたんだろう」

「そんなはずはありません。事務所ではみんなでいっしょに出前をとって、食事をしていたということでしたから」

「じゃあその時に、ビールで乾杯でもして、自分で運転できなかったんじゃないの？」

「……いや、それはないだろう。みんな、まだ仕事が残っているわけだから。……あなたはいったい、尾口の身に何が起こったとおっしゃっているのですか？」

「さあ、それがわからないんです」

「わからない？　さんざんまぜっかえしておいて、答は無しですか」

「一言もありません。しかし一方で、こういう情報もあるんです。時刻は午後11時50分。一一九番に、救急車を要請する電話が入ったそうです」

「救急車……？」

「電話の声は男で、女が息をしていない、と繰り返したあと、住所を末広ビルと告げた。ところがその数秒後、なぜか要請をキャンセルし、電話を切ってしまったというのです。

……靖史さん、どうしました？　南さんの顔に、何かついていきますか？」

「いや。何でもない」

「他のテナントさんにも聞いてみましたが、あの晩、救急車を呼んだという方はいませんでした。だとすれば、ピザを頼んだ男女の他にいない。彼らはずっと『離れ』に居続けたわけだ。そして、女性の身に何か異変が起きた。ピザ屋の店長は、電話の女性は薬をやっていたんじゃないかと言っています。それとこの通報が、びったり符号するんですよえ」

「その男女が、僕と、尾口さんと言うんですか」

「わかりません。あなたの他に合鍵を持ち、あなたと同じ目的で『離れ』を使用する誰かがいれば、その人物かもしれません。お心当たりはありますか？」

「お待ちください。ピザ屋だの救急車だの、だしぬけに、しかも一方的にそんな話をされても、それが本当かどうか、こちらには確かめる術がありません。そのような質問にはお答えしかねる」

「では、防犯カメラの話にもどります。それならいいでしょう？　先ほど、ビルから出てくる靖史さんの姿が映像に映っていた、と申し上げました。しかしそれは、ご本人が主張される時刻より、もっと遅い時刻だった。映像を見た人の話によれば、なんと午前1時だったそうです。そうですね？」

「ありません。その人影は、たまたま靖史君と歩き方が似ていただけです」

「そうですねか」

「その時間、靖史君は『すばる』にいたのですよ」

「そこは鵜呑みにできない感じですねえ。確かめようにも、お店の人が海外へ行ってしまっているし」

「それより前の午前0時に、彼は事故を起こしている」

「靖史さんが起こした事故かどうか、本当のところはわかりません。目撃者がいないわけですから」

「そこから疑いになるのですか……。大破したのは間違いなくうちの車です。無関係な別人の起こした事故であるはずがない」

「そのとおり。したがって、関係のある別人の事故、ということになる。いわば、協力者

です」

「協力者ですって？」

「失礼ながら、靖史さんが何か事をしでかした時、自分で始末をつけられず、誰かに尻ぬぐいを頼むということは、じゅうぶん考えられることではないでしょうか」

「それは、ただの憶測です」

「ところが、防犯カメラにも、ちゃんとそれらしき人の姿が写っている。午前0時30分。画面右側から、素早くビルの中に飛び込む人物がいたそうじゃありませんか」

「それがどうして、靖史君の協力者になるのですか。あのビルには夜通し、おおぜいの人が入りしていたと申し上げたはずですが」

「そうでもないんですよ。私は昨夜の真夜中、向かいのコンビニから三時間ほど観察しておりましたが、人の出入りは数えるほどでした」

「毎日そうだとは言ってません。三日前の夜はそうだったと申し上げている」

「その人物を靖史さんの協力者と疑う理由はふたつ。ひとつはビルから出てきた時刻が近い。午前1時、靖史さんがビルを出る5分ほど前に、その人物もビルを出ているそうです。もうひとつは身体的特徴。とても背の高い人物だったということなんですが……ところで南さん。あなた、身長は何センチ？ 一八五くらいですか？」

「……そこまで高くはありません」

「そこでちょっと立ち上がっていただくわけには、いきませんかねえ。私と背くらべを試みませんか」

「あなたは、私とその協力者だと言いたいのですか。いったい私が、靖史君に、何をどう協力したとおっしゃるのです？」

「もちろん、尾口さんの死体の処分と、事件の隠蔽です。事故を偽装したのも、靖史さんのアリバイ工作でしょう」

○午後2時 三番目の記者と私服刑事

「あのう、お取り込み中すみません……」

「なんだ君は。今入って来ちゃいかん。出て行きなさい」

「はい、でも……いま、警察の方がお見えになつて……」

「警察？ 何の用で？ ……いや、とにかくこっちが終わるまで、応接室でお待ちいただきなさい。……みなさん、お聞きになったでしょう。そういう事情ですから、会見は終了とさせていただきます」

「いやあ、それは困ります。ようやく本題に入ったところなのに」

「なにが本題だ。キチガイ扱いの次は、人殺し呼ばわりだ。つきあいきれない」

「まあ、そう言わずに。ねえ、南さん」

「いや、私としても、さすがにこれ以上お相手しかねる。今日はもう、ここまでにしまし
よう」

「それはダメだ。南さん、ここまで来たら、はっきり白黒つけたほうがいい」

「そんな、あなたまで……」

「私も同意見です。最後まで、見届けさせてもらいます」

「あんだ、いいから続けなさいよ」

「ありがとうございます。いやあ、持つべきものは仲間ですねえ。……ええと、どこまで話したっけ？」

「靖史君と南さんが、尾口さん死亡の証拠隠滅を諮った、というところまでだよ」

「そう、そうでした。尾口さんはやはり、事務所のクラウンを使って『離れ』へやって来たんだと思いますよ。そこで思いがけず靖史さんに遭遇し、まあ、なんとか、お二人なりの方法で、旧交を温められた。尾口さんはドラッグでハイになった状態でピザを注文し、おそらくそのすぐあと、意識を失って危険な状態に陥った。たぶん、この時にもう死亡していたのではないかと思います」

「……」

「動揺した靖史さんは、ピザ屋の店員を居留守でごまかそうとしたが、明かりをつけるのが早すぎて、やむなく金を払って追い払った。救急車を呼んでみたりもしたが、恐くなって途中で切ってしまった。困ったすえに、電話で南さんに助けを求めた。いかがです？」

「お話になりません。話の辻褄も合っていない」

「どういう点が？」

「あなたのいう『協力者』がビルに入ったのが午前0時30分。車が門柱に突っ込んだのはそれより30分も早い午前0時。順序が逆ではありませんか」

「おそらく、こういうことだと思います。靖史さんから電話を受けたあなたは、すぐに事務所へ向かい、駐車場に残された車に乗り込み、廃工場の門柱に突っ込んだ。つまり、事故を起こしたのは、尾口さんのクラウンではなく、事務所に残された方だったわけです。それから末広ビルに急行し、今度は尾口さんの使ったクラウンで、靖史さんを『すばる』に送り届け、車を事務所の駐車場へもどしておく。これなら辻褄も合うでしょう？」

「合いません。一一九の通報が午後11時50分。そのあと靖史君が私に助けを求めたのだとすれば、事故とのあいだに10分弱しかない。それだけの時間で、事務所の車を廃工場まで持つていくことはできません」

「だとすれば、靖史さんは、あなたへ助けを求めたあとで、一一九番をしたのでしょ。ずいぶん気持ち揺れていたんでしょ」

「では、肝心の尾口はどうなったのですか。ビルの中には遺体などありませんでしたよ。私たちがビルの外に運び出したというのなら、その姿が防犯カメラに写っていましたか？」

「いいえ。写っていませんでした。そのかわり、別のものが写っていた。午前3時、運送屋とおぼしき作業服の人物が現れて、大きなスーツケースを二つ、ビルから搬出していったと聞いています」

「運送屋？ スーツケース？ あなたのお話は、あとからあとから都合のいい話が出てくる」

「しかし、事実です。そのことは、映像を見たあなたが一番おわかりのはずだ。このスーツケースは、三階の『離れ』から搬出されたものに間違いありません。他のテナントさんはどなたも、心当たりがないということでしたから」

「では、その中に尾口の死体が入っていたと？」

「それ以外に、スーツケースの意味は説明できないと思うんですがねえ」

「そんなことはない。その運送屋を頼んだのは、おそらく尾口だと思いますよ。あのスー

ツケースは、『離れ』に保管してあった不要品です」

「……ほう、尾口さんが。では中身は何ですか？」

「本ですよ。お忘れですか？ ビルの中からは、『離れ』に保管してあった本もなくなっているのですよ。尾口がスーツケースに詰めて、赤帽を呼んだのでしょうか」

「すると、尾口さんは午前3時まで『離れ』にいたとおっしゃるんですか？」

「本人がいなくなっていて、スーツケースをドアの外に出しておき、運送屋に取りにこさせればいいのです。夜中でも仕事を受けてくれる業者は、いくつもあるでしょう」

『『離れ』から消えている本は、全部で何冊ですか』

「だいたい、二十冊ほどです。どれも分厚い、どっしりした本ですよ」

「それでもスーツケース二つ分にはならんでしょう。ひとつにはたしかに本が、しかしもうひとつの方には、尾口さんが詰められていたのではありませんか。だいいち、尾口さんが本を送ったなら、三日たった今もこちらの事務所に届いていないのは、なぜです」

「なにかの手違いか、それはわかりません。そこまでおっしゃるなら、その業者に直接お聞きになればよいではありませんか」

「残念ながら、どこの業者か特定できないんですよ。カメラには、運送屋が乗ってきた軽トラの幌の一部しか写っていなかった。消火栓を避けるために、ビルの真ん前に駐められなかったんですね」

「……あのう、お話のところをすみません、何度も何度も……」

「また君か。今度は何だね」

「警察の方が、どうしてもお話しがしたいと、お急ぎのようで……あつ、やめてください、困ります」

「申し訳ありません。会見中なのはわかっておりますが、通していただきます。終わるまでお待ちするつもりでしたが、内容が外まで筒抜けに聞こえておりましたので、これをお見せした方がよいと思いましたね」

「あつ！ そのスーツケースは……どうしてあなた方が……」

「ほんの5分ほど前に、運送屋さんが届けにきたのだそうですよ。職員の方々が青い顔をしてもてあましていたので、あずかっってきました。配達が遅れた理由も、わかりましたよ。送り状を見ると、配達指定日が6日14時となっている。ところが『6』の箇所インクの汚れがついていて、『8』のように読めてしまう。じっさいは一昨日配達されるはずのものが、今日になってしまった理由は、これだったようです」

「南さん、よかったですねえ。送り状の字を見れば、運送屋を頼んだのが尾口さんかどうか、わかりますよ。……いや、そんなことより、早くそのスーツケースを開けてみましょう」

「どうです、南さん。私どもが立ち会いますので、この場で開けてみては。ダイヤル式のロックがかかっているが、あなたなら番号をご存じでしょう」

「お断りします。これではまるで、見世物ではありませんか」

「私たちはむしろ、あなた方のためを思っているつもりなんですが。あらぬ疑いを晴らすためには、この場でスーツケースの中身をお目にかけるべきでしょう。なに、一分ですむことではありませんか」

「そうだよ、南さん。ごちゃごちゃ議論するよりも、それが一番てっとりばやい」

「私もそう思います。変に隠し立てをしては、逆に疑惑が深まってしまうですよ」

「……そうですか、では、仕方ありませんね」

「……お、おい、南……」

「こうなってはやむをえない」

「靖史君、何をそんなにろたえているんだね」

「そうですね。中身は本なのではないでしょうか？」

「まあ、ここまできたら、腹をくくるしかないでしょうなあ」

「待ってくれ！ みんな、待ってくれっ！」

「……びっくりしたなあ。急にどうしたんですか。大きな声を出して」

「スーツケースを開けるのは待ってくれ。その前に、みなさんに話したいことがある。さっきの飲酒運転の話だが、僕はすべて認めます」

「どういうことですか？」

「警察の方も聞いてください。勝手に持ち出した車で小学校に侵入して、動物を轢き殺したのは僕だ。女に逃げられて、やけ酒を飲んでいるうちにむしゃくしゃして、やってしまった。そのあと、廃工場の門に車をぶつけたところで我に返って、飲酒運転をごまかすために近所のスナックに飛び込んだんだ」

「ほう。そちらをお認めになりますか。なるほど。だから尾口さんの件には関与していない、ピザを受け取ったのも、救急車を呼んだのも自分ではない。そう言いたいわけですね」

「そうだ」

「残念ながら、飲酒運転のことも事故のことも、私はまったく興味がないんですよ。最初にそう申し上げたでしょう。さあ、南さん、早くケースを開けてください」

「……いいでしょう。みなさん、よく見ていてくださいよ」

「……」

「……」

「……あれえ、何だ、こりゃ」

「本じゃないか……ぜんぶ本だ……こっちのスーツケースも……南、これはいったい……」

「だから、はじめからそう言っているじゃないか。……どうです、みなさん。これで、尾口が死んでいるという推測は、撤回していただけるでしょうね。警察の方も、尾口の死体など入っていないことを、よくご確認いただきたい」

「いいえ。我々は、死体が入っているなどとは思っておりませんでしたよ。そんなことは重さでわかります。だからこそ、この場で開けてみたらとおすすめたのです」

「では、靖史君自身が事故を起こしたということは、認めていただけますね。飲酒運転と小学校の件は、私も知らなかった。残念です。ですが、尾口をドラッグで死なせたなどという濡れ衣よりは、ましと思わねばならないでしょう」

「おかしいなあ。それじゃあ『離れ』にいた男女は、いったいどこの誰だったんだろう」

「それも、この際お話ししてしましましょう。その時刻、『離れ』にいたのは、私です。ピザを注文したのは、私のつれの女性です。ピザを受け取ったのは、私です。救急車を呼びかけたのも私です」

「……南さん、あんた、何を言ってるんだ」

「ここまでくれば、本当のことをお話しします。靖史君が『離れ』を物置とは違う目的で

使っていることは知っていました。そこに便乗して、私も時々使わせてもらっていたのです。あの日は午後9時の電車で到着したあと、自宅へは帰らずにまっすぐ『離れ』に向かいました」

「お相手の女性は？」

「仕事として相手をしてもらえる類いの人です。一夜かぎりの関係で、名前も知りません。ご存じの方もいるだろうが、私は一昨年、妻に先立たれましたね。それ以来、時々こうしたことをしている」

「よすんだ、南さん。よしなさい」

「もちろん、薬物などは使っていません。あの夜は酒を飲み過ぎただけです。女性の呼吸が止まったと思ったのは、私の勘違いだった。もちろん、女性は問題なく帰っていきましたよ」

「友達として言わせてもらおう。あんたの先生への忠誠心はわかる。しかし、こんなことは間違ってる。ことは人命にかかわることだ。駐車違反の身代わりとはわけが違う」

「身代わりなどではありません。証拠もあります」

「どのような？」

「救急車を呼んだのが、私だという証拠です。この私の携帯を調べてみてください。一一九番にかけた記録が残っている」

「俺が調べよう、こっちへよこしてくれ。……午後11時50分。たしかに、発信記録が残ってる。この携帯の番号も、たしかに南さんのものだ」

「こういう通報は、先方に録音が残っているものですよ。そちらの音声も調べてみてください。私の声と一致するはずだ」

「それじゃあ、本当にあんたなのか……」

「お恥ずかしいかぎりです」

「まいったなあ。だとすると、尾口さんはいったい、どこへ行ってしまったんでしょうね」

「ようやくあなたと現状の認識が一致したようです。私もそれを知りたい。あるいはそちらの刑事さんが、新しい情報を持ってきてくれたのではないでしょうか」

「それは、あちらでお話します。南さんと靖史さんだけでお話ししたい」

「俺も？　なんで？」

「我々は、あなたに用があつて来たんですよ。しかし、こんなところでは話できません」

「話すことなんかないよ。今のやりとりを聞いていただろう。俺は尾口を殺してない。その時間、酔っ払って車を乗り回していたんだから」

「そのことは、確かにお認めになるわけですね」

「ああ」

「お酒を飲んでいたことも？」

「そうだ。学校に捨てられていた瓶を調べてくれ。俺の指紋がついているはずだ。ウイスキーが嫌いというのは嘘だよ。『離れ』にも、ジャック・ダニエルの空き瓶がごろごろしている」

「それならばなおのこと、どうか、あちらへお願いします」

「だから、俺は殺していないと言っているだろう。話があるならここで言え。みんなの前で言え。俺はここを一步も動かないぞ」

「……では、仕方がありません。じつは今朝方、中川大橋の下で、女性の死体が発見されましたね。その関係で、ちょっとお話をうかがいたいものですから」

「女の死体……橋の下から……？」

「頭部の古傷から、女性は尾口久子さんであることが確認されました。死因は特定できずありませんが、顔面を含めてはげしく損傷しています。衣服のベルトの隙間からは、ヘッドライトのガラス片が発見されました。どうやら車にはねられたようです。高洲東のご自宅に帰宅するとちゅうで被害にあったのでしょうか。このガラス片が、あなたが事故を起こした車のものとびったり一致しましてね」

「……なんだって？ なんのことだ……」

「つまり、轢き逃げです。それから死体遺棄と、偽装事故による事件の隠蔽。酒に酔っていたことも、たった今ご自身でお認めになった。我々は逮捕状を持っております。おわかりいただけましたら、ご同行をお願いします」

○午後2時15分 最初の記者

「お疲れさん」

「……ああ、どうも……。まだ残っていたんですか」

「まあね」

「みなさんと一緒に、パトカーを追いかけて行ったかと」

「いま行ったところで、騒々しいだけで取材なんかできないよ。南さんこそ、行ってやらなくていいのかい。靖史君、半狂乱だったじゃないか」

「もちろん、行きますよ。でも、もうすこし待ってもらいたい。さすがにくたびれた」

「あなたも、さんざんだったね」

「思い切って自分の恥をさらしたというのに、まさかこんなことになるとは。まあ、身から出た錆です。あなたには何度も忠告されたが、彼を見捨てることができなかった」

「このあと、どうするつもりかね」

「わかりません。まずは先生にお知らせしなくては。そのあと弁護士と相談して、保釈の手続きということになるでしょう。認めてもらうことは難しいかもしれませんが」

「そうだなあ。最後のあれは、完全な自白に等しいからね。今からあわてて撤回しても、説得力はないだろう。それまでだって、嘘ばかりついていたわけだから」

「そうですね」

「しかし、今回ばかりは驚いた。今回ばかりは感心したよ」

「……何のことですか？ 感心されるような覚えはありませんが」

「これはご謙遜だ。あなたの頭のよさはわかっていたつもりだが、それにしても、ここまでは思わなかった。加えてその実行力。明敏果断とはこのことだ。なにもかも、思惑通りにいったじゃないか」

「……どういう意味ですか」

「あなたが『離れ』に女をつれこんだりするもんか。本当は、あの記者の見立てが正しかったんだろう。靖史君は『離れ』で、尾口さんを薬で死なせてしまい、あなたに泣きついた。あなたはそれを利用して、この際思い切って、靖史君を葬ってしまおうと考えた。そ

こで轢き逃げをでっちあげ、その罪を彼になすりつけた。違うかい」

「……」

「さっきの記者連中とも、気脈を通じていたね？ あいつらは東京の連中だ。芝居の片棒をかつがせるために、向こうで手なづけたやつらを、わざわざ呼んできたわけだ」

「どうしてそう思われるんです？」

「一一九の通報だよ。防犯カメラやピザ屋とちがって、この情報だけは記者の取材ではつかめっこない。このことを知っているのは、電話を受けたオペレーターと、電話をかけた本人だけだからね。通報したのは、あんただだった。つまり、あんたがリークしたということだ」

「……」

「水くさいじゃないか。それとも、否定するかい？」

「……いや。内緒にしていって悪かったけど、さすがにあなたに手伝わせるのは忍びなくてね。でも、防犯カメラのことをあなたが切り出してくれたのは、助かりましたよ」

「わからないのは、動機だ。察するに、今度の件で先生もさすがに議員を続けていくことはできなくなるだろう。狙いはそのあたりかい？」

「まあ、世代交代ということですよ。靖史君も言っていたでしょう、石橋のやり方は、万事もう古いのです。そろそろ後進に道を譲るべきですよ」

「あとを継ぐのはあなたの同級生、というわけだ。尾口さんが死んだのは、本当にアクシデントだったんだろうね。まさかそこまで仕組んだわけじゃあ……」

「とんでもない。むしろこうなることを、私はかねてから心配していました。靖史君には近づくなと、あれほど言っておいたのに。思えば、可哀想な子だ」

「ま、仇はとってやった、というところか。しかし、短い時間でよく思いついたね」

「以前、靖史君が飲酒運転で捕まった時に、彼を嫌う職員の一人が思わず本音をもらったことがあった。『いっそのこと人でも跳ねていればよかったのに』と。それがヒントになりました」

「考えたもんだ。尾口さんを薬で死なせただけなら、せいぜい保護責任者遺棄。過失致死がついても、たいした刑にはならない。そこへ行くと、飲酒運転のうえ轢き逃げをし、なおかつ死体遺棄、事故の隠蔽工作となれば、悪くすると二十年を越える」

「まあ、そういうことです」

「靖史君は、スーツケースの中身が死体だと思っ込んでいたようだが」

「私が『離れ』で、そのように説明したからです。たったいま車で事故を起こしてきたから、君はその罪をかぶりなさいと。死体はスーツケースで運び出したあと、私が処分しておくからと」

「この送り状は、靖史君の字だね」

「私が指示をして書かせました。それから運送屋の手配も。彼は素直に言うことをきいてくれましたよ。手も声も震えていましたがね。その隙に、私はスーツケースに本を詰め、尾口君の死体を駐車場へ移しました」

「どうやって？」

「窓の外から下に落とすだけです。顔から落ちてしまったようで、尾口君には気の毒でした。靖史君には『同時にビルを出ると目立つから』と行って5分ほど待たせておき、私

は先に駐車場へまわって、尾口君をトランクに入れたのです」

「それから靖史君を『すばる』に送り届ける。彼が二時間後に酔って暴れたのも、あなたの指示か。警察につかまることでアリバイを強化するとか、そんなふうに言ったんだろ。な。そのあと、あなたは尾口さんの死体を橋の下に隠し、ベルトの隙間にライトの破片を隠しておいた。それから『離れ』で拾った酒瓶を学校に放り込み、事務所の駐車場に車を戻す、と」

「一一九番と、小学校のことは、靖史君に話していなかったもので、驚いていましたね。ウイスキーの瓶が『離れ』にあった物だということは、察したようだったが」

「全部あなたが自分のために行ってくれたと、信じ込んでいたんだな。それにしても、防犯カメラがよく、都合のいいシーンを撮り逃さなかったものだ」

「偶然ではありません。私は事務所の車に自転車を積み込み、廃工場からビルまではそれを使って行ったのです。その自転車を、配電ボックスの裏に駐めておきました」

「なるほど。そのせいで、コンビニの前に車が駐車できなかったわけだ」

「私がビルに出入りするところと、運送屋がスーツケースを運び出すところだけは、映像に残しておきたかった。この会見で話を誘導するためにね。自転車は次の日の朝、回収しました。『離れ』へ尾口を探しにいくという口実で」

「送り状の6を8と読めるように汚したのも、あなたの仕業か。その日時にあわせてこの会見を開いたんだね。衆目の中でスーツケースを突きつけられた靖史君は完全に追いつめられて、すすんで飲酒運転と事故を認めてしまった。そっちにはもっと大きな罪が待ち受けている、とも知らずに」

「刑事さんたちの飛び入りは、計算外の幸運でした。彼が事故車の運転を断言した場に、警察が立ち会っていた。これは裁判を考えると大きい」

「どうだろうねえ。尾口さんの死因がドラッグだということも、体中の傷が死後のものだという 것도、検死解剖の段階ですぐにはれると思うよ」

「解剖は、されません。若い女性の体が、轢き逃げされたうえに解剖されるなんて、気の毒すぎるではありませんか」

「そんな理由で、警察が解剖をやめてくれますか」

「やめてくれますとも。きっと、石橋や尾口会長の心情を慮ってくださいるはずですよ。とくにこちらからお願ひするまでもないと思いますよ」

「なるほど、そこまで考えていたわけか。さすがだね。……となると、いよいよ俺も腹をくくらなくちゃなるまい」

「……どういう意味です？」

「南さん。正直なところ、俺は驚いているよ。あなたほどの人が、俺みたいな記者を相手に、軽薄にペラペラ喋ってくれることにね。人間、大きな仕事をやり遂げた直後ほど、気が緩むらしいな」

「……」

「これまでずいぶん提灯記事を書いて、見返りももらってきたがね。今回のことはちょっと話が違う」

「……あなた、まさか……」

「あのドラ息子の子の肩を持つのは不本意だが、さすがにこれは見過ごせない。さっきの連中

とちがって、そこまでは腐ってないつもりだよ」

「それは、困りましたな」

「俺もつらいところだよ。あんたには、よくしてもらったから」

「そんなことをされては、こちらも何らかの防衛措置をとらざるを得ません。考え直してもらいたいですな。むろん、何もなしには言いません。ご希望をお伝えただければ、相応のことはさせていただきます」

「見損なってもらっちゃ困るなあ。そこまで腐っていないって言っているのに」

「……そうですか。それでは私も、腹をくくらねばなりません」

「そうなきい。その前に、携帯を返しておこう。俺にわたしたままだっことを、忘れていたでしょう」

「……あ！」

「さっきから、一一〇番につなぎっぱなしにしてある。この種の通報は、先方で録音がしてあるんですな。供述する手間が省けていいでしょう」

「き、貴様……！」

「ははは、付き合いは長いが、あんたの口からそんな言葉をきくのはじめてだ。人間の本性なんて、わからないもんだな。……それではそろそろ、失礼させていただきますか」